

競技は迫熱。白組が大逆転

市老人運動会

九月七日、市老人運動会が白根小学校体育館を会場に開かれました。これは、市老人クラブ連合会と市レクリエーション協会が協力して毎年行っているもので、今年は白根高校の点字クラブの生徒たちも手伝いに来てくれました。当日は約四百人のお年寄りが参加。赤(上の地域)と白(下の地域)に分かれ、にぎやかな応援合戦の中、「借り物競争」「ゲートボール競争」などに興じていました。勝負の方は大接戦で、最後の「紅白リレー」で白組が逆転優勝しました。



日本人はとても親切

タイ国の農業青年

西笠巻新田一の小嶋洋朗さん宅では、昨年のパイリンさんに続いて今年も、四月から十一月まで、農業研修のため日本にやってきたタイ国青年、シュウサック・ミーピマイさん(二十歳)を受け入れていました。のどかなタイ農業と違い、少ない人手でさまざまな機械を使って進める農作業や、配合飼料を食べてどんどん太る豚に驚いた様子のシュウサックさん。「日本人はよく働くしとても親切。食事のときなど、食べ物や酒を盛んに勧めてくれる」と印象を話しています。



9月25日、タイ国大使館の参事官らが様子を見に小嶋さん宅を訪れた(写真右から小嶋さん、シュウサックさん、参事官、農務官、左はじは国際農友会常務)

子供が描いた交通安全

ポスターコンクール

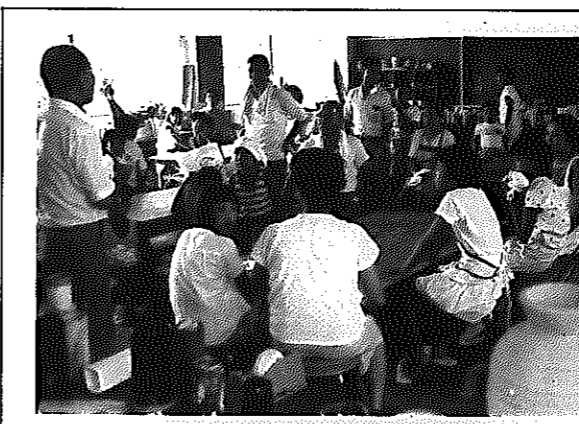
九月十六日、市役所で、市内の小学生の作品を対象に交通安全ポスターコンクールが開かれました。これは、児童・生徒が交通安全の自覚を高め、また、応募作品を展示することで市民の交通安全意識の向上を図ろうと、市交通対策協議会が毎年実施しているものです。今年は、昨年より百点以上も多い五百四十四点の作品が寄せられ、同協議会役員ら七人の審査で最優秀賞など四十点が選ばれました。これらの作品は、秋の交通安全運動期間中、ライオンロードに展示されました。(入賞者名は十月十五日号に掲載)



粘土だらけでがんばった

祖父母と孫の陶芸教室

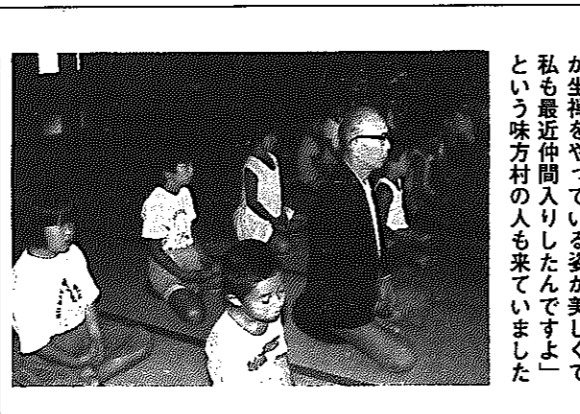
八月二十六日、中央公民館で、祖父母と孫の陶芸教室が開かれ、参加した小学校四、六年生の子とそのおじいさんおばあさん三十八人が、花器や茶わん作りに挑戦していました。これは、祖父母と孫のふれあいの中で創作する喜びを味わってもらおうと、同館が初めて開いたものです。シャツを粘土だらけにしながらくろを使う子や、慣れていないせいか、だいぶ個性的な作品を作る子もいたようです。また、お昼には午前中の奪鬨ぶりを収録したビデオを見たり、初めて見学する民俗資料館や、展覧室に感心したりしていました。



子供たちに坐禅を指導

東福寺

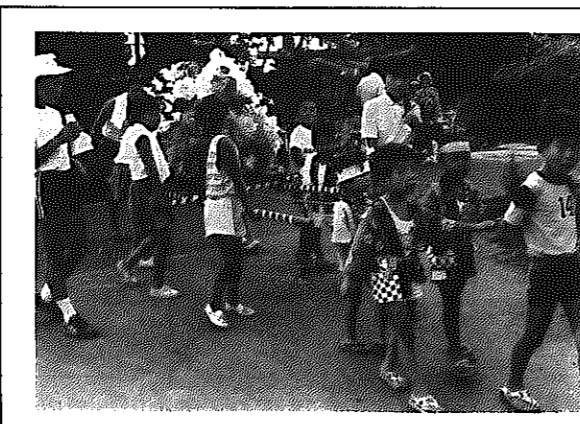
朝捲の東福寺では、三年前から毎週日曜日、子供たちを対象に坐禅会を行っています。住職の石高信司さんの話では、近所のお母さんたちから「子供が活発すぎて落ち着きがないので」と頼まれて始めたそうです。時間は午前八時から三十分ほど。ピシッとした姿勢の三年前から毎週欠かさず通ってくる子、キョロキョロする保育園の子と、さまざまです。「何しろ動き回りたい盛りの子ですからね。お役に立っているかどうか。でも、本人たちは毎週意欲的に通ってくるし、あまり厳しくないように行っていますよ」と、石高さんは話してくれました。



祭りにぎわい取り戻せ

新飯田館で子供みこし

八月二十八日、館子供会の親子二十人が神社に集まり、子供みこしを担いで部落の一軒一軒を回りました。この日は新飯田村部のお祭りです。昔は相撲大会などが行われ、市外からもおおいの人が来て盛大だったそうです。「何とかしてこのにぎわいをよみがえらせ、館だけでなく村部全体の祭りとして、子供たちの夏休み最後の思い出にしてやりたい」と、子供会では昨年からおこしを始めました。部落の人も喜んでいて、みこしの後は神社で花火大会と映画会。よその部落の人も聞きつけて、六十人も人が集まりました。



思いや心

地域社会とボランティア

東京はある住宅街の昼下がり。「ここにもおばあちゃん。うちに帰ってもおばあちゃん。どこに行ってもおばあちゃんばかりだ」と、横丁で甲高い子供の声。「何言ってるの、おばあちゃんがないと困るくせに」。むきになって言い返すおばあちゃん。この会話を聞いて、高齢社会の実態をとらえた子供の直感力はすごいなと思う一方、老人のやるせない気持ちがひしひしと胸に迫り

おじいちゃんを見に行こう

「一方「敬老の日」が近くなつたある日、新興住宅団地の子供が集まって何やら相談をしていました。「おい、みんな作文書いたか」

子供とお年寄りの交差点

「いや、書いてない。だって、ママになつておじいちゃんやおばあちゃん、この辺じやないもん。だれか知ってるか」「ぼくんちもいないからわからない。みんなでおじいちゃんを見に行こう」そうしよう、そうしよう」子供たちは、上野動物園のパンダを見に行くような騒ぎです。共感する場の演出を茨城県友部町のある小学校の先生から聞いた話です。この学校で「お年寄り」について作文を書かせたところ、いつもは下手な作文しか書けない子供たちまで、お年寄りの豊かな経験と知識につい



子供が成長し、お年寄りが生きがいを感じる交差点、それをだれがどのように作っていけばよいのでしょうか。

淑徳短期大学教授 前全国ボランティア活動振興センター所長 木谷宜弘